

PROVIDENCE DUAL BASS STATION DBS-1

音色補正型プリアンプ

オープンプライス(市場実勢価格: ¥26,000前後)

●問い合わせ: パシフィクス

☎045-510-4060

◎http://www.providence.jp/



2系統のインプットを備えた 2チャンネル仕様のプリアンプ

独立したEQコントロール部を備えた2チャンネル仕様のモデル。さらに、インプットも2系統が用意され、2本のベースをそれぞれのチャンネルに割り当てて使用することも可能だ。EQはベース(60Hz)、ミドル(フリーケンシー・ツマミで150Hz~1kHzから中心周波数を選択)、トレブル(3kHz)の3バンドで、それぞれ14dBのブースト/カットを行なえる。内部回路電圧は24Vで駆動し、クリアなサウンドが特徴となる。

[SPECIFICATIONS]

●入出力: インプットA、インプットB、チューナー・アウト、アウト、電源●コントロール: ベース×2、ミッド×2、トレブル×2、マスター×2、ミッド・フリーケンシー×2、ミュート・スイッチ、チャンネル切り替えスイッチ●電源: 付属ACアダプター●サイズ: 101(W)×122(D)×58(H)mm●重量: 約370g



◀ミッド・フリーケンシーつきの3バンドEQとマスター・ヴォリュームをABのそれぞれのチャンネルに備える。

▶インプットAのみにベースをつないだ場合は、ABそれぞれのセッティングをフットスイッチで切り替えて使用可能だ。



COLUMN ペダル型プリアンプを使用するときの注意点

文: 河辺真

ペダル型プリアンプを常時オンで使用する場合は、その導入意図が明確でないと存在意義が薄れてしまいます。例えばアクティブ・イコライザーを搭載したベース→ペダル型プリアンプ→ベース・アンプと接続した場合、イコライザーやトーン・コントロールなどの機能が3カ所もあることになるわけで、多くの箇所でも音色を調整できることは利点でもあります。余分な電子回路を通るぶんだけ確実に信号が鈍り、情報量が減る可能性が大きくなります【図1】。極端な話、もともとの音色に問題がなく、音色補正も加工も必要ないのであれば、ペダル型プリアンプを導入しないほうが素直な音色が得られますし、無用なトラブルも避けられるでしょう。

ライブやレコーディングでPAミキサーやレコーディング機器にライン信号を送る場合は、ベース・アンプの直前でDIを介して分岐させることがほとんどですが、ペダル型プリアンプを使用するときには、その接続位置がDIの前か後ろか、言い換えるとペダル型プリアンプの音色効果がライン信号に反映されるのか否か、を常に頭に入れておくべきです。客席側で聴く外音と、自分がモニターしている音は案外ギャップがあるものだし、ベース・アンプの手前でペダル型プリアンプを使っている場合は、その設定が多かれ少なかれアンプ固有の音色に影響されているはず。例えば、アンプから出ている音をモニタリングしながらペダル型

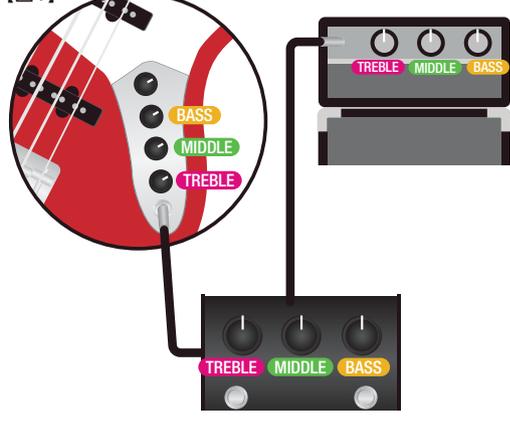
プリアンプで高域を極端に強調した設定にした場合、聴感上は心地よくても、単にベース・アンプが高域を再生できていないだけで、PA卓には耳障りな音色が送られている可能性もあるわけです【図2】。

また、(これはペダル型プリアンプに限ったことではないですが)過激に作りこんだ音色は、かえってエンジニアが音色を作りにくくする要因になることがあります。音色変化の可変幅が大きいペダル型プリアンプは、その変化自体が楽しいもので

すが、あまりに極端な設定にすると、ノイズが増えて音抜けを悪くすることも多々あります。ほかの楽器とのバランスを考慮しつつアンサンブル全体に配慮した音作りを心掛けたいところです。

ペダル型プリアンプを常時オンで使用する場合でも、オン/オフ時の音量バランスは同じくらいに設定しておきましょう。これは、ほかのエフェクターやアンプが正常に機能するよう信号レベルを適正に保つほか、いざという時にバイパス音で対処しやすいようにするためです。

【図1】



【図2】

